

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月6日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2009～2012

課題番号：21320045

 研究課題名（和文） 院政期の宗教施策に関する寺院文芸研究—鳥羽から後鳥羽院政を
めぐる領域複合的解明

 研究課題名（英文） Studies of Temple Literature Related to Religious Policies of the
Cloistered Sovereigns Era: Cross-disciplinary Investigations of
the Toba to Go-Toba Reigns

研究代表者

近本 謙介 (CHIKAMOTO KENSUKE)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：90278870

研究成果の概要（和文）：

研究代表者が共同研究で取り組んできたいくつかの寺院調査において多くの発見があった。これまでに、それらの共同研究の成果報告の場のひとつとして、研究集会「前近代の日本におけるあらたな法会・儀礼学の構築をめざして—ことば・ほとけ・図像の交響—」（2011.5.12～13 於ロンドン大学 SOAS）を開催した。このワークショップでは、唱導といったことばの領域、仏像彫刻や寺院空間の領域、図像や絵画の領域などから多面的に分析を加えることにより、あらたな法会・儀礼学の構築をめざした。続いて、研究集会「日本仏教研究の領域複合的解明の試み—宗派性の超克—」（2012.5.17～18 於ハーバード大学）では、日本仏教を宗派性によって捉えることの問題点や限界を問題意識として共有した上で、それらを超えたところにはいかなるあらたな仏教研究が立ち現れるのかについて、それぞれの研究者が報告を行った。これらは、法会・儀礼という枠組みと、宗派・信仰という宗教的内面の双方からあらたな仏教研究の方向性を模索する試みであった。

研究成果の概要（英文）：

The coordinator and collaborative research team have made considerable discoveries through investigations in temples and produced the following results:

1. Research conference “Words, Deities, Icons: Exploring Ritual Performance in Pre-modern Japan,” CSJR Summer International Workshop 2011, London University SOAS, May 12-13, 2011.

This conference aimed at establishing a new study of Buddhist services and rituals by analyzing the following fields from multiple perspectives: religious texts, statues and temple spaces, and icons and paintings.

2. Research conference “Beyond Sectarianism – New Horizons for Interdisciplinary Studies in Japanese Buddhism,” Harvard University International Symposium, May 17- 18, 2012.

In this conference, the researchers discussed the possibility of new Buddhism research that transcends sectarianism, based on an awareness of the problems and limitations in understanding Japanese Buddhism denominationally.

These research conferences explored new directions for Buddhism research from two aspects: Buddhist services and rituals as a framework and sectarianism and worship as an inner religiosity.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	3,600,000	1,080,000	4,680,000
2010年度	2,900,000	870,000	3,770,000
2011年度	2,800,000	840,000	3,640,000
2012年度	2,900,000	870,000	3,770,000
年度			
総計	12,200,000	3,660,000	15,860,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：宗教文芸・院政期・唱導・法会・汎宗派的考察・貞慶・縁起・遁世

1. 研究開始当初の背景

本研究に関連する国内・国外の研究動向及び位置付けは、以下の2点にまとめられる。

(1) 平安時代末期から鎌倉時代にかけての院政と関わる文芸研究の隆盛と寺院文芸研究の深化の必要性。

本研究と関わる動向として、小峯和明氏『院政期文学の研究』(笠間書院 2006年)の刊行と本研究の着想に至った経緯とは密接に関係する。小峯氏は著書の中で宗教言説への関心の高まりに言及し、「唱導をはじめ、法会や儀礼への実体解明の研究動向」と対応した院政期研究の必要性について説いている。氏の著書において残された課題はまさにそうした部分であると考えられ、それが本研究の着想に至った経緯の一つであり、かつ研究の意義を自覚した点でもある。

(2) 平氏政権期から鎌倉時代初頭に関する寺院の聖教調査に基づく唱導・法会文芸研究の飛躍的進展。

このうごきは近年急速に広まり、海外研究者の参加も盛んな領域となっている。仁和寺・真福寺・勸修寺・金剛寺等における聖教調査に研究代表者も携わるなかで、既知の資料からは窺い知れない寺院文芸の様相が明らかになりつつある。

こうした研究状況の中で、以下のような問題点が顕在化してきたように思われる。すなわち、これまでの寺院聖教調査は豊かな実りをもたらしたものの、目録作成と新資料の紹介に傾きがちであった点、個々の寺院の状況把握に終始する場合も多かった点は否めない。こうした現状を考慮したとき、これまでの寺院聖教調査の成果の横断的分析による新たな寺院文芸論構築の必要性が新たな課題として立ち上がってきたと考える。本研究がめざすのは如上の課題の克服である。

2. 研究の目的

本研究は、鳥羽院政期を保元の乱帰結論に単純化させることなく、その宗教施策という側面を寺院文芸の世界から積極的に探求し、その結果を、後白河および後鳥羽院政における宗教施策と対比させることによって、継承と展開の様相を把握し、王の意向が反映された寺院文芸論を新たな視点に基づいて構築することを目的とする。

研究代表者のこれまでの研究から明らかになってきた点の一つとして、鎌倉期初頭の唱導や社寺縁起の背景に、後白河院や後鳥羽院など、王のはたらきや強力な意向が存在する点がある。院政期の寺院文芸考察には王権

との関わりの解明が必須であり、院による宗教施策という視点から、これまでの研究成果を発展させる必要があることを多くの具体的な事例から自覚させられるに至った。

おそらくそうした状況は、平氏政権以前の院政においても意識されなければならない。殊に鳥羽院政については、鳥羽院崩御による保元の乱惹起という歴史的事実から、あまりに保元の乱帰結論に引きずられた評価しか為されてこなかったように思われる。白河・鳥羽院政における神祇・仏法重視に基づく宗教施策については、研究を深める必要がある。実際に、鳥羽院の所領の寺院への寄進は際立っており、勅願寺の多さも特筆すべきである。真言宗において覚鑿を護持僧として伝法院方を庇護した点や、行尊を重用して修験道に深く帰依した点などは、後世の仏教史にも影響を与えた重要事であり、南都においても法相宗と真言宗とを併せ持つ性格の内山永久寺の建立や、春日信仰に王が深く介在した例として意義深い春日御塔の建設など、諸宗兼学の道場建設や神祇信仰への接近といった、鎌倉期以降の仏教の状況を先取りした、まさに積極的な宗教施策と呼ぶべき事績が数多く確認される。美術の方面に目を配るにつけても、鳥羽院の関わった優品は枚挙にいとまが無く、院政期美術のひとつの頂点を為していたことを考えると、鳥羽院政の宗教施策が意図していたものは、次世代にもつながる先見的なものであったことが窺えるのである。こうした問題意識のもとに、鳥羽院政の宗教施策に関する位置付けを明確にすることで、保元の乱をはさむ日本の歴史と文化の大転換期における継承と展開の様相を探り、これまでの研究成果をさらに発展させることを意図している。

3. 研究の方法

本研究は複数の寺院を調査対象としているため、綿密な研究計画のもとに研究を開始する必要がある。そこで本研究においては、研究組織内に3つのプロジェクトを配し、寺院調査を伴うものについては時期をずらして実施するという工夫を凝らして、実地調査を伴わない研究プロジェクトを同時に推し進めることで、研究が円滑に進められる体制を整えた。さらに領域複合的研究態勢を整えるため、文学研究者に、歴史学・仏教学・美術史学の専門家を加えて、研究組織を構成した。3つのプロジェクトは以下の通り。

(1) Aプロジェクト

真言寺院聖教調査を担当するプロジェクト

ト。調査対象寺院は、勸修寺・仁和寺・真福寺を中心とし、必要に応じて他を含める。これらの調査対象寺院のうち、勸修寺に関しては研究分担者上島が連絡と日程調整を行い、仁和寺・真福寺については研究分担者阿部が行う。これは、これまでの各寺院における調査形態を生かし、良好な調査環境を継続するためである。

平成21年度は、前半に、鳥羽院政から後白河・後鳥羽院政の宗教施策に関する資料の抽出と、それらの資料の目録整備を行う。その際、これまでの研究で作成してきた目録をも有効に用いて時間の短縮を図り、写真撮影が可能な調査対象については、データ収集を積極的に進行。たとえば、真福寺の南都関連聖教については、研究代表者が平成20年度までに交付を受けた科学研究費補助金による目録が大部分完成しているため、即座に原本確認に移れる態勢を整えている。

勸修寺調査には、近本・上島・阿部・苫米地と数名の研究協力が当たる。仁和寺調査には、近本・阿部・川崎が当たる。真福寺調査には、近本・阿部・苫米地・川崎と数名の研究協力が当たる。調査の過程で真言教学の問題は苫米地から、美術史の問題は藤岡・山本から知見を得る。

(2) Bプロジェクト(Aプロジェクトとの調査時期重複を避けるため、調査は2年目に始動する。)

南都寺院聖教調査を担当するプロジェクト。調査対象寺院は、東大寺・興福寺を中心とし、必要に応じて他の寺院および神祇に対する施策を解明するために春日大社等を含める。これらの調査対象寺院のうち、東大寺に関しては研究代表者近本が平成20年度までに交付を受けた科学研究費補助金によって作成したリストをもとに調査を行い、研究分担者阿部が協力する。興福寺に関しては、研究分担者上島が交付を受けた科学研究費補助金によって作成した研究成果報告書『興福寺旧蔵史料の所在調査・目録作成および研究』および奈良文化財研究所編『興福寺典籍文書目録』をもとに、近本と上島との協力体制のもとに行う。調査の過程で、院政期以前の奈良仏教の問題については、根本から知見を得る。

Aプロジェクトとの調査時期をずらすため、調査は2年目の平成22年度に実施することとして、平成21年度は上述の目録整備に努める。

(3) Cプロジェクト

既紹介資料・美術工芸調査を担当するプロジェクト。既紹介資料・美術工芸調査から、鳥羽院政から後白河・後鳥羽院政の宗教施策に関する資料の抽出と、目録・データベース整備を行い、新資料を含むAプロジェクトおよびBプロジェクトとの統合を図る。

研究成果発表の場として、国内外の学会・研究フォーラムの場を用意する。研究期間終了時には、それらの成果を学会・社会に還元するための出版等の方法を考える。それらを通じて、院政期の宗教施策に関する寺院文芸論を構築する。

4. 研究成果

研究成果の内容と方向性に基づきながら、実際の研究成果について簡潔に記すこととする。

(1) 主要な寺院における聖教調査および研究

調査対象とした主たる寺院において、それぞれに調査・研究の進展を見た。

① 真福寺宝生院文庫調査・研究

研究分担者阿部泰郎が中心となり、悉皆調査に向けて作業を進めるとともに、断簡整理を精力的に行い、南都東大寺弁曉草や、新出の禅籍資料等を数多く発見した。それらの成果を含む成果発表の場として、名古屋市博物館において、『大須観音展』を開催した。

② 勸修寺調査・研究

研究分担者上島亨が中心となり、年間数回のまとまった調査を通じて、悉皆目録作成にほぼ到達した。研究期間後半は目録の確認作業に多くの時間を当て、文化財指定も視野に入れた新たな段階へと進みつつある。

③ 南都寺院聖教ネットワーク調査・研究

研究代表者近本が中心となり、東大寺図書館等に所蔵される資料の読解と分析を進めた。鳥羽院政期を中心とする院政期の宗教施策に関わる問題を連携研究者の専門分野と連動させて研究成果をあげる機会や、後白河・後鳥羽院政期における継承と展開の諸相を明らかにするいくつかの資料について、国内外の学会・フォーラムにおいて発表した。また、東大寺をめぐる寺院間聖教ネットワーク研究のため、代表者が調査に加わっている河内長野市金剛寺聖教との連関を視野に入れた調査・研究を進め、清水寺と南都の関係をめぐり問題等の新資料を発見して、成果を発表した。

(2) 領域横断的研究成果への展開

以下に、主要なものについてのみ記す。

① 美術史の研究成果との連携

「院政期から院政期から鎌倉期の宗教施策に関する研究-南都仏画を視座として-」(2010年2月11日 於筑波大学)を開催して、本研究の海外協力者であるボストン美術館アン・モース氏と奈良国立博物館谷口耕生氏を講師として招き、院政期の南都仏画の視点から院政期の宗教施策について考えた。

② 「前近代日本における宗教と文学・文化との相関に関する研究」(2010年3月18~19日 於イリノイ大学)においては、本研究の海外協力者であるイリノイ大学ブライアン・ルパ

ート氏との共同企画で、日本側からは本研究のメンバー5名が研究報告を行い、メンバー相互の研究課題の接点について確認する議論を行った。

②国際研究集会「時代の転換期の宗教と文学-西行と慈円を視座として-」(2010年9月8日 於タリン大学)において、王との関係における聖や遁世の問題について具体的な考察をすすめるべき内容や問題点について確認した。

④東アジア宗教文献国際研究集会(2011年3月9～10日 於筑波大学)を開催し、東アジアにおける唱導文献を全体的にとらえていくことの必要性について議論を深めた。

④歴史民俗博物館の共同研究(代表者阿部泰郎)による成果を「東アジアにおける宗教テキストと表象文化」(2010年年10月6～7日 於イリノイ大学)において発表し、遁世と芸能についても考察を深めた。

(3) 領域複合的・総合的成果への深化

①研究集会「前近代の日本におけるあらたな法会・儀礼学の構築をめざして-ことば・ほとけ・図像の交響-」(2011.5.12～13 於ロンドン大学SOAS)において、法会・儀礼の場を総合的に捉えるべき問題意識の共有がなされた。

②研究集会「日本仏教研究の領域複合的解明の試み-宗派性の超克-」(2012.5.17～18 於ハーバード大学)において、宗派的思考の限界を考えるとともに、汎宗派性の議論からどのような新たな仏教と文芸に関する議論が展開できるかを検証した。

上記の二つの国際研究集会を経て得られた知見は、それぞれ適切な形態で学会と社会に還元すべく、出版の計画を進めている。これらを通じて得られる研究成果は、新たな寺院文芸論・文化論としての意義を有するものと確信している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計19件)

(1) 近本謙介、中世における神仏習合思想の展開—鎌倉時代初期の文芸をめぐる—、2010 キェフ国立大学・筑波大学日本研究学術フォーラム報告集、査読無、1、2013年、12-19

(2) 阿部泰郎、聖徳太子の世界像—中世太子宗教テキスト体系の形成—、日本宗教文化史研究、査読有、15、2011年、1-26

(3) 近本謙介、解脱房貞慶の唱導の多面性と意義—今津文庫所蔵『解脱上人御草』所収「南京北山宿非人等敬白をめぐる—、説話文学研究、査読有、45、2010年、126-138

(4) 阿部泰郎、中世宗教テキスト体系の範

疇—密教寺院の成立と展開における経蔵とその目録の形成をめぐる—、日本宗教文化史研究、査読有、142、1-7

(5) 近本謙介、南都復興の継承と展開—慶政の勸進をめぐる二つの霊託—、文学、査読無、11-1、2010年

[学会発表] (計47件)

(1) 近本謙介、平安時代の東大寺における修験と浄土教—聖宝と永観を中心に—、第11回GBS「平安時代の東大寺—密教興隆と末法到来のなかで—」、2012年12月9日、東大寺

(2) 近本謙介、南都における戒律復興と浄土信仰の汎宗派的展開—貞慶の事績の多面性を視座として—、ハーバード大学国際研究集会「日本仏教研究の領域複合的解明の試み—宗派性の超克—」、2012年5月17日、ハーバード大学(アメリカ)

(3) 阿部泰郎、中世日本における国土の〈経蔵〉化—一切経と埋経をめぐる王と聖—、ハーバード大学国際研究集会「日本仏教研究の領域複合的解明の試み—宗派性の超克—」、2012年5月17日、ハーバード大学(アメリカ)

(4) 上島享、新たな日本中世宗教史像の構築へ、ハーバード大学国際研究集会「日本仏教研究の領域複合的解明の試み—宗派性の超克—」、2012年5月17日、ハーバード大学(アメリカ)

(5) 阿部泰郎、修正・修二会の呪師作法と翁の発生、コロンビア大学日本宗教センターシンポジウム、2011年10月15日、コロンビア大学(アメリカ)

(6) 近本謙介、戦略的言説としての縁起と託宣—慶政における寺院勸進・修造をめぐる—、ヨーロッパ日本学会(EAJS)第13回国際大会、2011年8月26日、タリン大学(エストニア)

(7) 近本謙介、法会における荘厳のこぼれの構造とその背景—解脱房貞慶の唱導をめぐる—、ロンドン大学日本宗教センターワークショップ「前近代の日本におけるあらたな法会・儀礼学の構築をめざして—ことば・ほとけ・図像の交響—」、2012年5月12日、ロンドン大学SOAS(イギリス)

(8) 上島享、法会・儀礼を生み出した僧侶とその思想、ロンドン大学日本宗教センターワークショップ「前近代の日本におけるあらたな法会・儀礼学の構築をめざして—ことば・ほとけ・図像の交響—」、2012年5月12日、ロンドン大学SOAS(イギリス)

(9) 藤岡穰、行身と生身—四天王寺聖霊院聖徳太子像をめぐる—、ロンドン大学日本宗教センターワークショップ「前近代の日本におけるあらたな法会・儀礼学の構築をめざして—ことば・ほとけ・図像の交響—」、2012年5月12日、ロンドン大学SOAS(イギリス)

(10) 近本謙介、中世宗教文芸をめぐる課題と方向性—南都をめぐる寺院資料を中心として—、2010年中国人民大学・北京大学・筑波大学日本語文学フォーラム、2010年11月6日、中国人民大学(中国)

(11) 近本謙介、中世説話文学と唱導—解脱房貞慶の著述をめぐる—、国際研究集会「東アジアにおける宗教テキストと表象文化」、2010年10月6日、イリノイ大学(アメリカ)

(12) 近本謙介、西行と西行の文化史の再評価、国際研究集会「時代の転換期の宗教と文学—西行・慈円を視座として—」、2010年9月8日、タリン大学(エストニア)

(13) 上島享、日本中世社会の形成と修正月・修二月、芸能史研究会大会、2010年6月6日、同志社女子大学

(14) 近本謙介、南都における学侶の知の系譜、名古屋大学比較人文学先端研究特別演習、2009年12月25日、名古屋大学

(15) 近本謙介、院の宗教施策と聖の文筆活動—鳥羽院と西行を視座として—、国際研究集会「前近代日本における宗教と文学・文化との相関に関する研究」、2010年3月18日、イリノイ大学(アメリカ)

[図書] (計7件)

(1) 阿部泰郎、名古屋大学出版会、中世日本の宗教テキスト体系、2013年、598

(2) 川崎剛志編、磐田書院、修験道の室町文化、2011年、250

(3) 阿部泰郎編、中世文学と隣接諸学2 中世文学と寺院資料・聖教、竹林舎、2010年、646

(4) 根本誠二・サムエル・C・モース編、奈良・南都仏教の伝統と革新、勉誠出版、2010年、360

(5) 上島享、日本中世社会の形成と王権、名古屋大学出版会、2010年、950

6. 研究組織

(1) 研究代表者

近本 謙介 (CHIKAMOTO KENSUKE)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：90278870

(2) 研究分担者

阿部 泰郎 (ABE YASURO)

名古屋大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：60193009

上島 享 (UEJIMA SUSUMU)

京都府立大学・文学部・准教授

研究者番号：60285244

(3) 連携研究者

川崎剛志 (KAWASAKI TSUYOSHI)

就実大学・人文科学部・教授

研究者番号：70281524

谷口孝介 (TANIGUCHI KOSUKE)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：40272124

苔米地 誠一 (TOMABECHI SEIICHI)

大正大学・人間学部・准教授

研究者番号：00340456

根本誠二 (NEMOTO SELJI)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：10250995

藤岡 穰 (FUJIOKA YUTAKA)

大阪大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：70314341

山本陽子 (YAMAMOTO YOKO)

明星大学・造形芸術学部・准教授

研究者番号：20350283